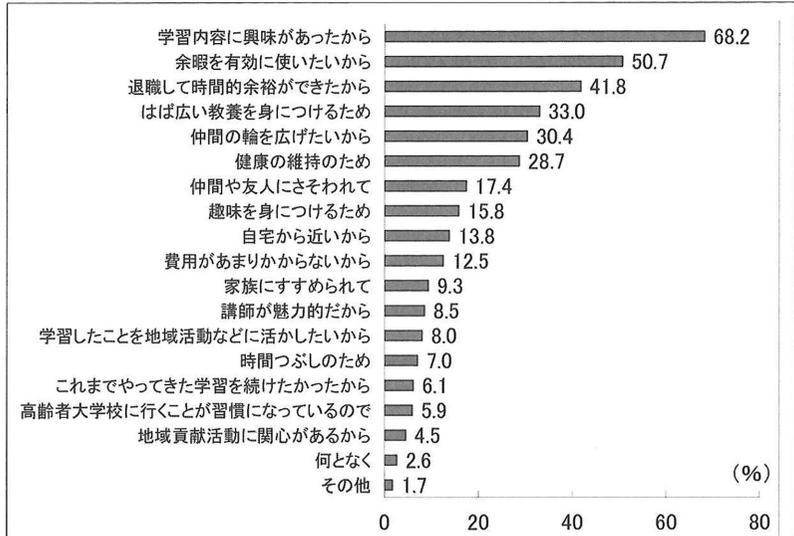


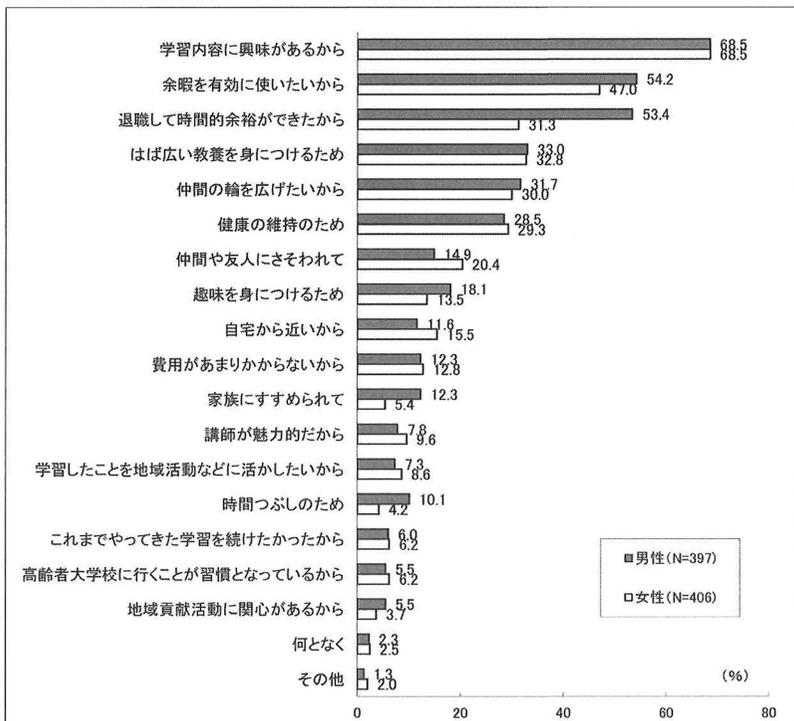
第4章 受講者の講座受講に対する意識とその実態

第1節 受講のきっかけと目的

図表4-1は、受講者が大阪府高齢者大学校に来たきっかけ（複数回答）を示したものである。最も高率のきっかけは「学習内容に興味があったから」（68%）で、「余暇の有効利用」（51%）がこれに次いでいる。「退職して時間的余裕ができたから」（42%）も高率で、これら3項目が40%以上の回答率の項目であった。「はば広い教養を」(33%)、「仲間の輪を広げる」(30%)、「健康の維持」(29%)も、ほぼ30%以上の回答率で高率だといえる。「学習したことを地域活動などに活かす」(8%)、「地域貢献活動に関心があるから」(5%)などの地域貢献に関するきっかけはやや低率であった。学習内容・余暇活用・仲間づくり・健康づくりが、受講者側からみた4つの大きな受講理由だといえる。「時間つぶし」といったあまり主体的ではない項目にも7%の回答があった。なお2008年に西宮市宮水学園で行われた同様の調査では、「余暇の有効利用」(67%)が最も多く「学習



図表4-1 講座受講のきっかけ（複数回答；N=846）



図表4-2 男女別にみた受講のきっかけ

内容」は52%であった（大阪教育大学生涯教育計画論研究室編『高齢者への学習支援に関する調査研究：西宮市宮水学園の事例を中心に』2009年）。大阪府高齢者大学校では、受講者はまず学習内容に注目しているといえる。

男女別にみた受講のきっかけを示したものが図表4-2である。ここで注目したいのが退職と関連する項目である。「退職して時間的余裕ができたから」（男性53%、女性31%）、「余暇を有効に使いたいから」（男性54%、女性47%）、「家族にすすめられて」（男性12%、女性5%）でとくに男性のほうが高率であったのは、職業生活後の退職を経験する者が男性に多いことと関連があろう。「時間つぶしのため」（男性10%、女性4%）に男性が有意に高率なのも見逃せないだろう。「仲間や友人にさそわれて」（男性15%、女性20%）では女性のほうが高率であった。男性にとくに退職関連のきっかけが多いと考えられる。

巻末資料で年齢別に受講のきっかけをみたところ、「退職して時間的余裕ができた」は60代以下50%、70代前半37%、同後半以降27%と、年齢にともなう比率の低下がうかがえた。「健康維持のため」は逆に、60代以下24%、70代前半32%、75歳以上45%と、年齢が上がるほど比率が上昇していた。「高大に行くことが習慣になっているので」、60代以下4%、70代前半7%、同後半以降10%と、年齢の上昇とともに比率が上がっていた。

では、受講者にとって最も大事な受講目的は何か（単数回答）。この点をみたのが図表4-3である。これによると、全体の52%が「学習内容」をあげていた。「仲間とのつながり」と「余暇有効利用」は、それぞれ18%と17%であった。「健康な生活」も12%で以上3項目の比率は近い数値にあったが、「社会貢献・地域貢献」は2%とかなり低率であった。表の真ん中の部分より男女別の差をみると、「余暇の有効利用」で男性21%、女性13%とはっきりした差がうかがえた。女性は「学習内容」が高率であった。右端の年齢別では、「健康な生活」が60代以下10%、70代前半14%、同後半以降18%と、年齢が上がるにつれて比率が上昇していた。逆に「仲間とのつながり」は年齢が上がるにつれて比率が低下していた。

図表4-3 最も大事な受講目的

最も大事な受講目的	全体	性別		60代	70代前半	70代後半以降
		男性	女性			
学習内容	51.5 (418)	45.2	57.3 **	53.5	50.0	47.8
仲間とのつながり	18.2 (148)	18.4	17.0	19.2	16.0	13.9
余暇の有効利用	16.7 (136)	21.0	12.7	16.0	18.4	18.3
健康な生活	11.9 (97)	13.2	11.6	9.8	14.2	18.3
社会貢献・地域貢献	1.6 (13)	2.1	1.3	1.4	1.4	1.7
全体	812	385	395	437	212	115

第2節 継続受講について

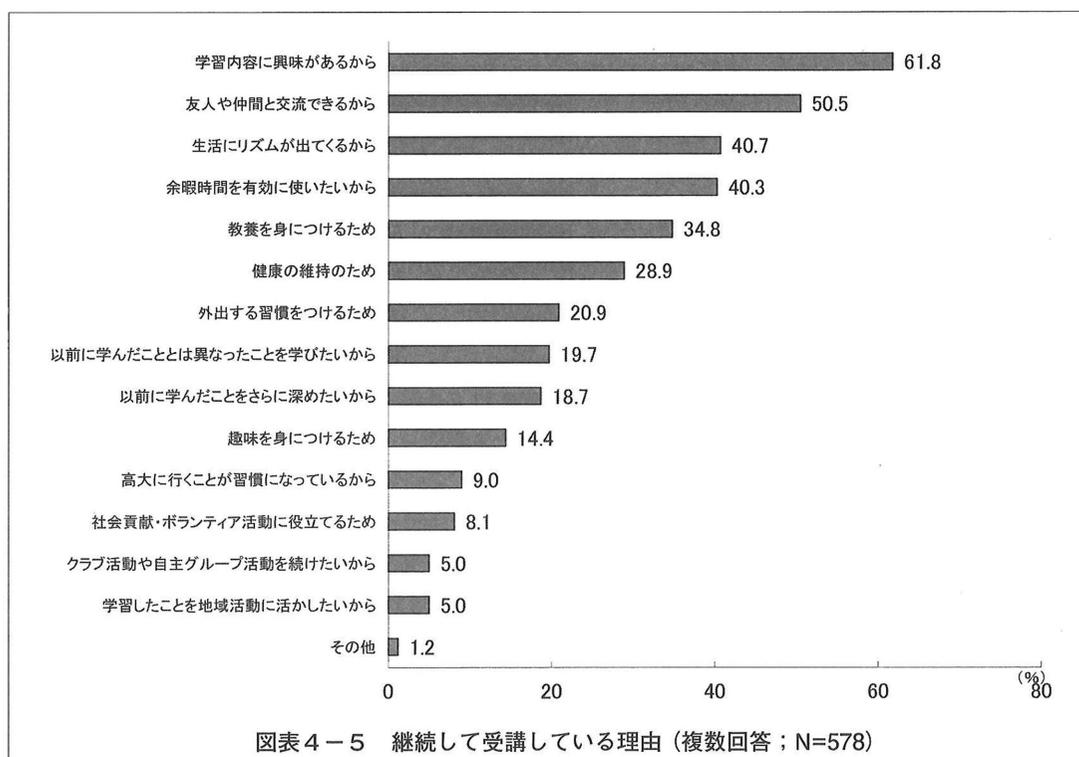
図表4-4は大阪府老人大学時代を含めた受講年数を示したものである。「今年が初めて」が30%で最も多く、「2年目」の20%がこれに次いでいる。この2項目で51%となる。継続受講者の比率は70%であった。「3年目」以降になると徐々に比率が減っていくが、大阪府高齢者大学校は2009年に開学しているため、調査当時は開学8年目であった。また基本的に受講期間は1年ごとに更新される

図表4-4 受講年数

受講年数(含大阪府老人大学受講)	比率(回答数)
今年が初めて	30.3(256)
2年目	20.2(171)
3年目	17.4(147)
4年目	15.5(131)
5年目から9年目	16.3(138)
10年以上受講している	0.2(2)
全体	845

ため、ある他の高齢者大学のように継続受講者が過半数を占めるということは生じていない。ただ2013年度調査では大阪府高齢者大学校受講経験者は41%、旧大阪府老人大学受講経験者は10%であり、この数年で継続受講者数がかかなり増えていることが察知できる。継続受講率では男女差はあまりうかがえなかったが、年齢では差が出ていた。5年以上の継続受講者率は、60代以下13%、70代前半20%、75歳以上26%であった。なお継続受講が認められている西宮市宮水学園での調査では、5年以上の継続受講者率は52%であった。

では継続受講の理由は何なのか。この点をみたのが図表4-5である。これによると、最も多い継続理由は「学習内容に興味があるから」(62%)で、「友人・仲間との交流」の51%とともに、こ

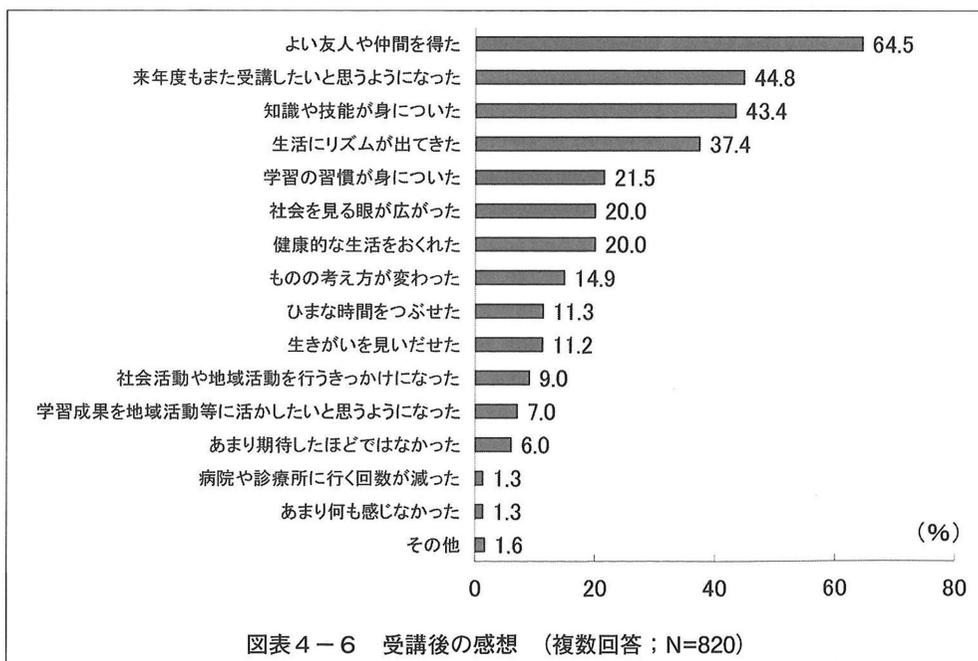


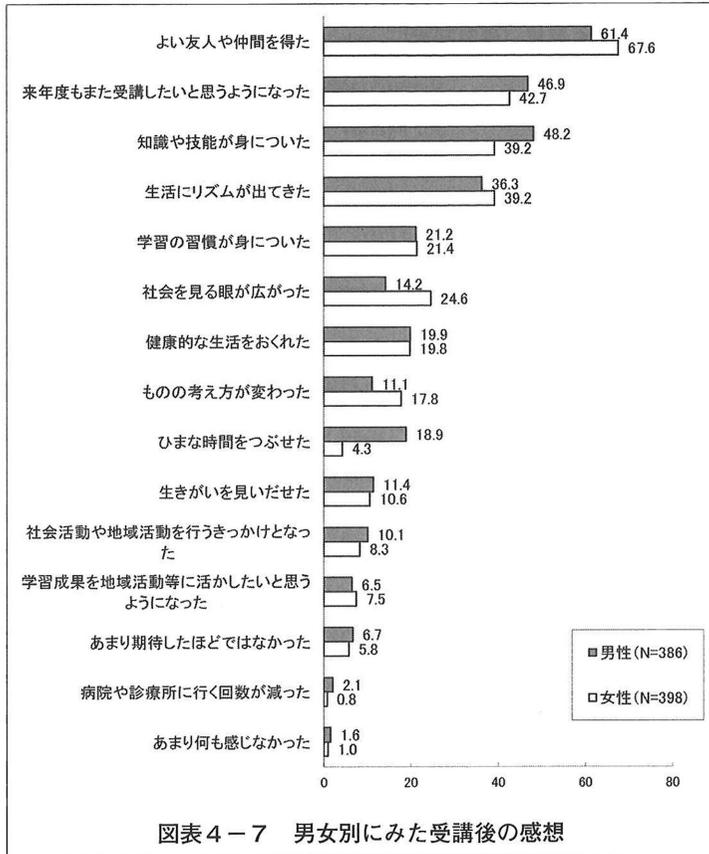
の2つが過半数の回答率を示していた。そうしたなかで注目したいのが、「生活にリズムが出てくるから」が41%の選択率を示した点である。高齢者大学受講は学習内容や人間関係だけでなく、ともすれば単調になりがちな高齢期の生活にリズムを提供するという重要な機能があるといえるだろう。逆に地域活動やクラブ活動、社会貢献活動関連の項目はやや低率であった。

第3節 受講後の感想と評価

図表4-6は講座受講後の感想（1月時点）を示したものである。これによると、最も高率であった項目は「よい友人や仲間を得た」で、65%の者がこの項目を選択していた。学習内容や余暇有効利用を目的として受講した者の多くにとっては、まず何よりも友人を得たという点がその成果であったといえよう。次いで高率であったのが、「来年度もまた受講したいと思うようになった」（45%）、「知識や技能が身についた」（43%）、「生活にリズムが出てきた」（37%）の3項目であった。1年制の講座ではあるが受講者のほぼ半数が継続受講を希望していることがうかがえる。また生活にリズムをあたえるという側面も高齢者大学の重要な側面であろう。逆に「学習成果を地域活動に活かす」（7%）などは低率であった。「あまり何も感じなかった」「期待したほどではなかった」といった消極的な回答もかなり低率であった。

受講後の感想を男女別にみたものが図表4-7である。これによると、「ものの考え方が変わった」（男性11%、女性18%）、「社会を見る眼が広がった」（男性14%、女性25%）で女性のほうが有意に高率であり、逆に「知識や技能が身についた」（男性48%、女性39%）、「ひまな時間をつぶせた」（男性19%、女性4%）で男性のほうが有意に高率であった。女性のほうが意識変化の側面で変化

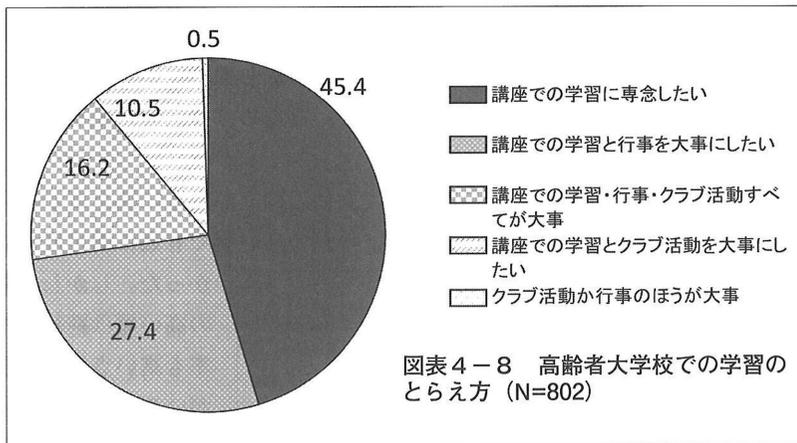




が出ていたことがわかる。逆に「ひまつぶし」で男性の比率がやや高かったのは気になる。

巻末資料をもとに年齢別の変化をみると、「生きがいを見いだせた」と「健康的な生活をおくれた」の2項目で、年齢が上がるにつれて比率が上がっているのがうかがえた。とくに、70代後半以上の層でこれらの比率が60代の2倍以上になっているのは注目される。

図表4-8は、「高齢者大学校での学習のとらえ方」について単数回答でたずねた結果である。全体の45%の者が「講座での学習に専念したい」と答えていた。つまり半数近くの者が、高大での行事やクラブ活動、社会貢献活動などよりも、講座での学習を焦点化したいということであった。



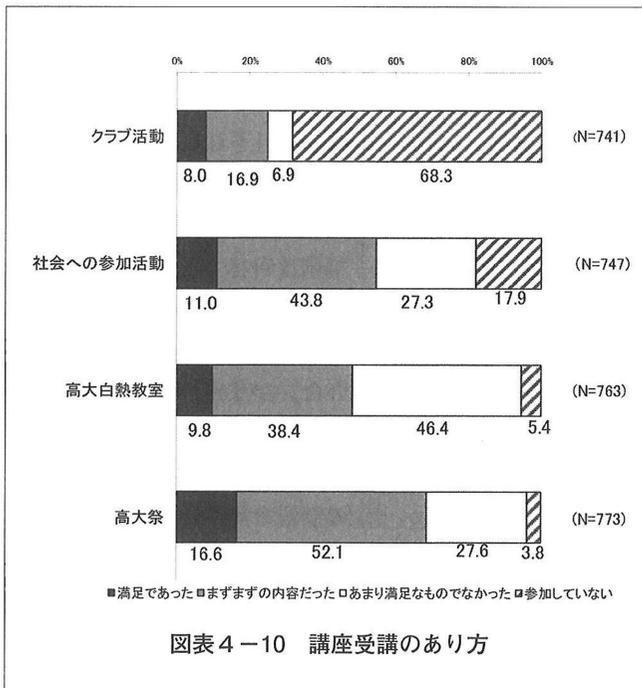
講座学習と行事を重視したい者は27%であった。講座とクラブ活動を重視する者は10%で、3つとも重視するというのが16%であった。さすがに講座よりもクラブ活動や行事のほうが大事だという者はほとんどいなかった。この設問に関しては、とくに性別や年齢による差はうかがえなかった。

では、高大での学習成果をいかに活かしたいのか？ この点をみたのが図表4-9（複数回答）であるが、これによると、「自分の人生で学んだことを社会・地域活動に活かしたい」（36%）、「高大で学んだことを社会・地域活動に活かしたい」（35%）、「高大で学んだことを特に他で活かしたいとは思わない」（33%）の3項目がほぼ同率であった。「学習したことを他に活かしたいとは思わ

図表4-9 学習成果の活用に対する意見（複数回答）

考え方	比率（回答数）
自分の人生で学んだことを社会・地域活動に活かしたい	35.7(253)
高齢者大学校で学んだことを社会・地域活動に活かしたい	35.3(250)
高齢者大学校で学んだことを特に他で活かしたいとは思わない	33.0(234)
学習したことを他に活かしたいとは思わない	10.7(76)
全体	709

ない」者は11%であった。こうしてみると受講者の一定数は、何らかのかたちで学習したことをどこかに還元したいと思っているといえそうである。ただ、高齢者大学校で学んだ



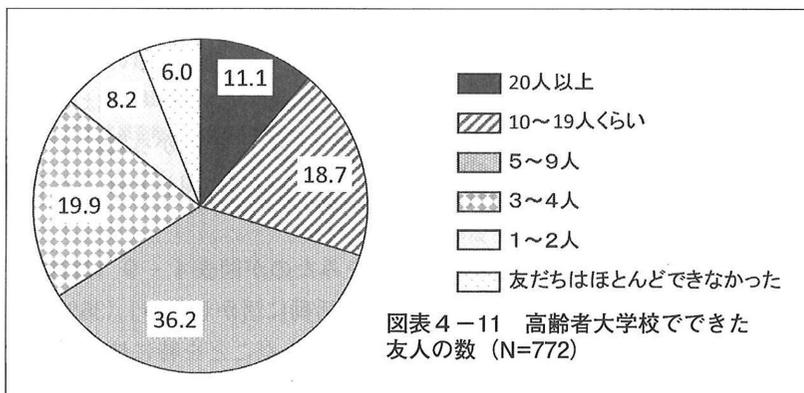
ことをストレートに活かすかどうかにはやや距離があるともいえる。なおこの設問では、性別と年齢による差はほとんどどうかえなかった。

では先に少しふれた（高齢者大学校での）クラブ活動や行事については、いかに評価がなされているのか？

この結果を示したのが図表4-10である。これによると高大祭は評価が高いといえそうである。何らかの肯定的な評価を示した者は全体の69%であった。同様の比率は、社会への参加活動では55%、高大白熱教室では48%であった。白熱教室では不満の声のほうが多かったといえる。クラブ活動に関しては、参加していない者が68%にも達しているため、今回の結果からその

満足度や評価を判断することはむずかしいだろう。

巻末資料にて男女差をみると、社会への参加活動と白熱教室で女性のほうが有意に満足度が高いことが示された。年齢別ではクラブ活動と社会への参加活動で、年齢の高い層で有意に満足度が高



かった。しかし年齢の高い層は継続受講率も高い点には留意がいるだろう。

図表4-11は高齢者大学校でできた友だちの数を示している。これによると、5～9人の友だちができた者が36%で最

も多く、3～4人の20%と10～19人の19%がこれに次いでいた。友だちが「ほとんどできなかった」者は6%であった。男女別では、「20人以上」できた者は男性13%、女性10%と男性に多いものの、「10人以上」だと男性28%、女性33%と女性のほうが多かった（巻末資料参照）。また年齢による差はうかがえなかった。